



徴古館報 第32号 2016年(平成28年)7月発行



バessler・ドレス 明治時代中期

「侯爵鍋島家と東京」



佐賀藩主鍋島家は、明治維新を機に大名から華族、そして侯爵となり、住まいも佐賀から東京へと移りました。そして鍋島家における侯爵家時代は、貴族制度を禁じる日本国憲法の施行に伴い華族令が廃止される昭和22年(1947)まで60年間続きました。

今年、明治から150年近く営まれた東京・青山霊園内の鍋島家御墓所が東京都に返還され、佐賀・春日山御墓所へ改葬されます。11代鍋島直大と胤子・栄子夫人らをはじめ、明治以降の鍋島家の方々が眠る青山の御墓所は、東京における侯爵鍋島家の足跡を物語る場所でした。

改葬を機に開催する第76回企画展「侯爵鍋島家と東京」(5月23日～7月23日)は、侯爵鍋島家発展の基礎を築いた直大を中心に、東京におけるその歩みを振り返る企画展です。直大は、栄子夫人と共に海外経験を活かして明治社交界をリードする一方で宮内省式部長を務めるなど伝統を重んじ、その姿は和魂洋才という明治国家発展の気風そのものでした。

鍋島直大の洋行



ローマでの鍋島直大

鍋島直大の洋行

11代直大の初めての洋行は明治4年(1871)。留学生として岩倉使節団とともに横浜を出航後、アメリカで別れてイギリスに留学しました。明治7年に佐賀の乱の報を受けて一時帰国した後は、胤子夫人を伴い再渡欧しました。

そして明治11年の帰国から2年後にあたる同13年3月、胤子夫人とともに明治天皇に拝謁し、特命全権公使イタリア在勤を命じられます。ところが同月に夫人が病没したため、昭憲皇太后の御沙汰により廣橋栄子と婚約。やがてローマの日本公使館で挙式を挙げ、夫妻揃ってローマ社交界で活躍しました。その多忙な日々について直大は後年の回顧録で、「晩餐夜会日々之如ク盛ナル事ニテ、栄子ヲ伴ひ同車ニテ処々へ行き、舞踏へ加ハリタル事モアリ」と記しています(「鍋島弼斎翁小傳」)。

洋行の目的

直大は生涯で数千首の和歌を残したと言われます(「松風集」)、明治4年の初めての洋行にあたって、その想いを和歌に詠みました(「復歴本書」及び「戦時歌集」)。

開けたる世のよき事をわか国へ
行ふための務めなりけり

とつ国のひらけし業を敷嶋の
大和心に添て学はむ

そして明治13年、ローマ公使に就いた実感を、次のように詠んでいます(「鍋島弼斎翁小傳」)。

志し貫きたれば遠つ親に
報ひる道も開けたりけり

洋行は日本の近代国家建設に資するためであるという目的意識が明確であるとともに、西洋の先進的な文化を、「大和心」という伝統的な日本の精神風土をベースに学ぶという和魂洋才のスタンスも明瞭です。またイギリス留学の経験がローマ公使勤務という形で花開いたことが先祖への報いになるとしており、家に対する強い意識を表現していることがわかります。

鍋島直大・栄子夫妻と鹿鳴館

鍋島直大・栄子夫妻と鹿鳴館

直大・栄子夫妻が帰国した翌年の明治16年、明治日本における欧米流の文化を象徴する鹿鳴館が落成し、夜会や舞踏会などが開かれました。

そこで直大は豊かな海外経験を活かし、鹿鳴館での舞踏会で幾度もホスト役を務めるなど、「鹿鳴館の華」と謳われた栄子夫人とともに牽引します。この時期に栄子夫人が用いたとして伝わるドレスは、当時欧米で流行していたスカートに膨らみのあるバウンススタイルのものです(表紙写真)。



バウンス・ドレス姿の栄子夫人
明治20年前後
公益財団法人鍋島報効会所蔵

欧化主義への警鐘と和洋折衷

栄子夫人のバウンス・ドレスは当時の流行を取り入れたものですが、生地に小袖地を用いた他に類を見ない貴重な作例です。まさに明治らしい、鹿鳴館時代を象徴する和洋折衷の希少な遺品として、当館では16年ぶりに特別公開しています。

ところが、和魂洋才というスタンスで洋行を経験した直大にとって、「大和心」を取り失ったような、度を過ぎた欧化主義という国内での潮流は苦々しいものでした。とくに宮内省に勤務し、日本の伝統音楽である雅楽の保護や振興に力を入れていた直大は、「一にも二にも西洋と、何から何まで欧米崇拜の傾向著し」として警鐘を鳴らしています(中野禮四郎「鍋島直大公略伝」)。

明治17年 侯爵鍋島家の誕生

侯爵鍋島家と鍋島邸西洋館

直大はローマから帰国した直後、式部頭しきぶのかみ(のち式部長)を拝命し、宮内省で宮中儀礼や雅楽などを掌つかさどる式部職の長として明治天皇の近くに仕えることとなりました。

2年後の明治17年には、華族令により侯爵を授爵し、名実ともに皇室の藩屏たる「侯爵鍋島家」となりました。さらにそれと同じ年、永田町邸内に新館の建設を計画。明治24年(1891)に日本館が落成、翌年7月には西洋館が落成したことを記念し、9日に明治天皇、10日に皇后両陛下の行幸啓を仰ぎました。住所は東京麹町区永田町2丁目1番地、現在の総理大臣公邸一帯にあたります。

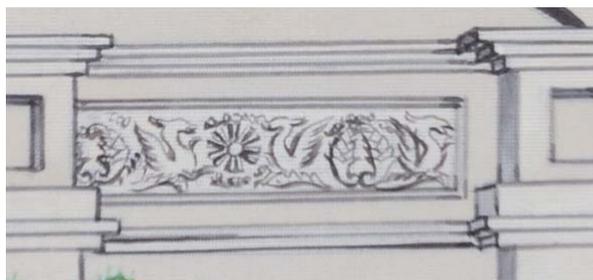
設計者は佐賀出身の坂本復経(清水店=現・清水建設の初代技術長)で、同20年に着工。しかし翌年、坂本の急逝により、唐津出身の辰野金吾が計画監督となり設計から8年の歳月を経て完成に導きました。専門家の設計による国内最古の洋風大住宅と評されますが(『明治工業史』工学会、昭和2年)、関東大震災での倒壊が惜しまれます。



爵記 公益財団法人鍋島報効会 所蔵



永田町鍋島邸西洋館 (写真) 公益財団法人鍋島報効会 所蔵



明治天皇行幸図(部分) 昭和10年 公益財団法人鍋島報効会 所蔵

無双の鍋島風

直大が侯爵を授かったのは明治17年7月7日。この夏、直大はある詩書を書幅にしたためます。

その漢詩は、「儒教の書を学び武術を鍛練し、人間固有の大きな気持ちを養えば、他家に双ぶことのない鍋島家独特の気風を身につけることができる」という内容。

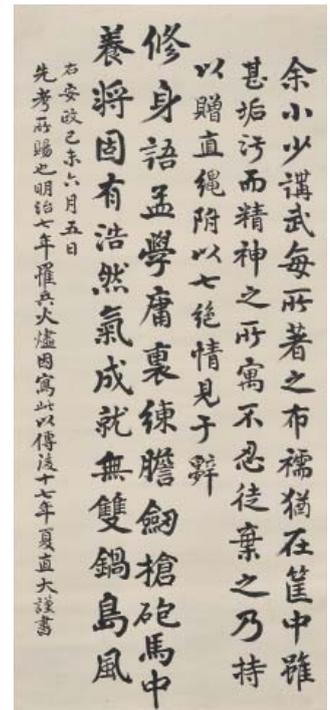
これは10代直正が隠居の前年にあたる万延元年(1860)、嫡男直大の初出府に際して書き与えたものです。このとき直正は、藩祖直茂の談話を子の勝茂が書きとめた聞書一冊も与え、「古風押し立て候よう心に懸くべく候」と諭しました。

幕末の佐賀藩は直正主導のもと、長崎を通じて西洋の文物や知識・技術を先進的に導入したことで知られますが、鍋島家らしさの真髄とは、文武両道を基とし、質実剛健を旨とすることであり、先進的なものや洋風なものを希求することではありませんでした。

これを直大に伝えた直正の手になる詩書は、惜しくも明治7年の佐賀の乱により焼失。そこで後世に伝えるため明治17年夏に直大が書したのです。この夏、直大は侯爵となり、鍋島邸西洋館の設計が開始された年でもあります。

西洋館の玄関車寄せ上部前面には鍋島家の家紋杏葉紋に加え、中央部に龍造寺家の十二日足紋が表されていました。戦国時代、龍造寺家は鍋島家の主家にあたり、両家は血縁的な繋がりも深く、龍造寺家は近世大名鍋島家の成立にとって欠くことのできない家でした。

イタリア公使時代にも自作の和歌に「遠つ親」(先祖)を数多く詠み込むなど、明治10年代にはすでに自家に対する直大の歴史意識の高揚ぶりが窺えます。日本で初めての専門家設計による洋風大邸宅という先駆的な鍋島邸の西洋館は侯爵鍋島家の象徴的な建造物となりますが、その建設そのものが、広く龍造寺家も含めた「遠つ親」への報恩の意識とともにあったと考えられるのです。



鍋島直正詩・直大書(写)

公益財団法人鍋島報効会 所蔵

直大が明治17年に書した書幅も現存しておらず、上図版は直大筆の書幅を、のちに旧佐賀藩士の相良頼善が転写したものです。

図録のご案内

「侯爵鍋島家と東京」展図録を、1部 500円で販売しています。郵送も可能(送料160円)。電話・メール等でご注文を受け付けています。

収蔵資料ウェブ公開のご案内

公益財団法人鍋島報効会(徴古館)所蔵資料を、徴古館ホームページおよび文化遺産オンラインでご覧いただけます。

徴古館ホームページ <http://www.nabeshima.or.jp/collection>
文化遺産オンライン <http://bunka.nii.ac.jp/db>

研究助成事業

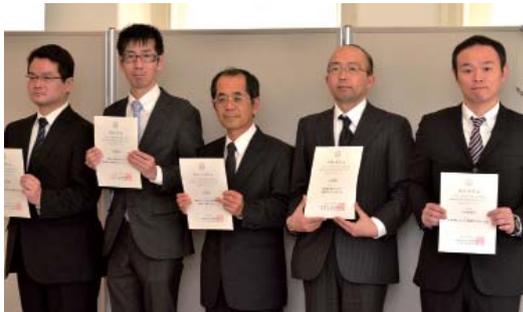
鍋島報効会では平成13年度より、郷土佐賀の研究を奨励し、その成果を地域に還元することを目的に、一般公募による研究費の助成を行っています。

【2月】 研究報告書第7号発行

第13・14回(平成25・26年度)に助成を受けた9名の研究者による研究報告書 第7号を刊行しました。ページ数は254ページ、価格は1,500円で、当会事務所のほか、お電話やメールでもご注文を受け付けています。また、過去に発行した第1号から第6号も引き続き販売中です。

【4月4日】 第16回研究助成授与式

平成28年度授与者が決定し、徴古館において授与式が執り行われました。授与者・研究テーマは以下の通りです。
 小野博司(神戸大学大学院法学研究科)「近代法の翻訳者—古賀廉造の研究」／貴田潔(静岡大学人文社会科学部)「環有明海地域における荘園制と地域社会のネットワーク」／東中川忠美(吉野ヶ里公園管理センター)「褐袖印花文技法の基礎的研究—窯跡出土資料を中心として」／伊藤慎吾(國學院大學文学部)「初期蓮池藩における八幡信仰とその担い手」／村松洋介(佐賀県文化財課)「佐賀県域における青銅器の受容と変容」



【5月28日】 第15回研究助成報告会

昨年度に助成を受けた5名による第15回報告会が行われ、各報告に対し、当財団理事で徴古館館長の高島忠平より講評・助言がありました。佐賀の植物・歴史・民俗にわたる各報告に、ご参加いただいた53名の方からの拍手が響きました。今回報告された平成27年度の研究成果と平成28年度分を合せた研究報告書 第8号は、来年度に刊行の予定です。



展示案内

第77回展 有田焼創業400年記念 「鍋島焼・有田焼の400年」展

【会期】平成28年8月22日(月)～11月12日(土)

佐賀有田の地で日本最初の磁器生産が開始されたのは初代藩主鍋島勝茂公の時代、今から400年前のことでした。やがて藩窯では技術・デザインともに洗練された独自の「鍋島焼」が開発され、佐賀藩の献上品・贈答品として将軍家や朝廷をうならせました。磁器の生産が始まって今年で400年の節目を機に、江戸時代から近代にいたる鍋島家伝来の鍋島焼や有田焼の名品、また古文書からその歴史的な歩みを紐解きます。



色絵葛竹垣文皿

会期中のイベント

第22回 プレイエル小音楽会

朝香宮鳩彦^{やすひこ}の第一王女紀久子様が昭和6年(1931)、13代鍋島直泰様に降嫁される際に婚礼調度としてフランスで誂えられたピアノ「プレイエル」による小音楽会です。(要事前予約／各部先着50名)

【月日】8月28日(日)

【時間】午前の部11時～
午後の部14時～

【料金】1000円
(企画展もご覧いただけます)

【演奏】山田 幾子さん
ショパン作曲
ノクターン op.9-1など



平成28年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

古地図で佐賀城下の魅力再発見!

今年度の探訪会スケジュール

城下のまち歩きを通して歴史を再認識し、今後のまちづくりに繋げることを目的とした佐賀城下探訪会。今年度は下記の日程で行います。

第1回 9月22日(木・祝) 第3回 11月6日(日)
「有田・伊万里バスツアー」「三重津・寺井津・諸富津」

第2回 10月2日(日) 第4回 12月4日(日)
「2代光茂公ゆかりの地」「城下の水系 東めぐり」

徴古館報 第32号 2016年(H28)7月発行

公益財団法人 鍋島報効会

〒840-0831 佐賀市松原2丁目5-22

TEL・FAX (0952)23-4200 MAIL info@nabeshima.or.jp

URL http://www.nabeshima.or.jp